

卷 頭 之 辭

朝 比 奈 泰 彦



終戦後間もなく關西に生薬學會が生れたことは新日本の薬學界に於ける重要な出来事の一つである。戦前は生薬と云へば陳腐のものに考へ、又生薬の専門家と云へば骨董いぢりの物好きの様に薬界でも別扱を受けて居た。所が戦争の中期以後になると所謂現代醫藥の不足が目立てきた。流石の新物好みの軍衛生部の連中も現地自活とか云ふ名目の下に草根木皮を漁りだした。然し現代の合成薬一點張の教育を受けた臨床家には生薬學者の熱心な協力も無駄であつた。蓋し彼等は現代合成薬の代用品として生薬を使わうとしたからである。生薬はそれ自身獨立の醫藥であつて、代用品では斷じてない。

現代の醫學は時々刻々新智識を増加し、治療界に學術的根據のある藥品を要求し、之に應じて製薬技術者が活躍し、次から次へ優秀な製品を生産しつつあるが、其資源に遡ると生薬を原料とするものが大半であることを忘れてはならない。又すべての病に有効な種類は合成藥品にはないのみならず、現在の治療界が持つ現代藥品では到底治癒しない病氣も少なくない。元來内服薬の應用は吾人の飲食物の消化とあまり違はない條件で攝取されてこそ理想的の効果を發揮し得るものと信ずるが、突然合成藥品の如きものを内服して、假令其時効果があつても、常道的の吸収によつたものでないから、必ず其一方に反作用(大きく云へば中毒作用)があることは疑のないことである。

勿論、現に使用中の生薬自身の効果の學術的根據は不明のことが多いが、これは將來生薬學者と薬理學者或は臨床家との協力で其解決に努力すべきは當然で、生薬研究の光輝ある未來もそこに存在して居る。唯現在の方法としては、臨床家は専ら從來の經驗を活用して適劑を適所に應用

すべきである。

生薬の容積が合成薬品に比してあまりにも大であることは使用上の缺點であろう。然しそれが爲に生薬自體の効果劣等視することは不合理である。宜しく製剤技術の改良によつて其缺點を補ふべきである。又將來は或生薬は有効成分を綜合的に抽出した製剤又は單一な有効成分に轉身するかも知れないが、それは先のことである。將來の轉身を見越して今の生薬を輕んずるは愚である。若干の化學製品の顯著な効果に眩惑して、生薬を過少評價する誤は訂正さるべきである。然し生薬にも善惡上下がある。其品質の向上は生薬學者の負擔する責任である。其爲には品種の改良もやらねばならず、生産増強の爲には栽培法の研究もやらねばならない。今後の日本の生薬界は益々多端である。

今や關西生薬界の人士が此重要性を認識して、生薬學會を設立したことは、時宜に適した壯舉である。希くば、會員諸君は本誌上に其蘊蓄を傾け、國民の福祉に貢獻されん事を切に祈る次第である。

東大名譽教授、日本生薬學會名譽會長

「生薬」の創刊に際して

刈 米 達 夫

醫藥資源として生薬の重要性最も大なる今日、我等同人の雑誌「生薬」が生れ出でたことは偶然でない。我國に於る從來の生薬學の傾向は獨逸流の「生薬を識る」ことを主とした。今後は「生産より消費まで」の學問として發展しなければならぬ。30年前、自分が生薬學に志した頃に出た米國 Kraemer の新著 Pharmacognosy に「生薬學に於ては生薬の產地から輸出港までの經路を取扱はねばならぬ」といふ様な意味を序文に述べてあつて大に同感し、自分の進路に大なる影響を與へた。藥學も、生薬學も應用科學であるから、それ自身の學問の深さといふものは無いが、其の基礎になる純正學術——生薬學に於ては化學、植物學、醫學など——の進歩を着々と取り入れて進歩しなければならぬ。種の複雑なハッカ、コカ、チョーセンアサガオ等の生薬學的研究に、細胞學を取り入れなければ無意味である。甘扁桃と苦扁桃、ヤマジソとオオヤマジソ、樟と芳樟、エゴマとレモンエゴマ等の關係は今後は成分遺傳學的に検討しなければならぬ。生薬の有効成分含量増加の問題にも同様の研究は必ず將來貢獻をもたらすであろう。

應用科學は基礎學科の綜合といふ處に重點がある。即ち衆智の綜合が必要である。其の衆智の綜合に本誌が役立つならば本懷である。

京大教授、日本生薬學會會長

學者の觀点をかえよ

藤 澤 友 吉

日本の醫療界は醫藥品に對して從來あまりにも化學合成品にのみ依存し期待するところが大きかつたために、戰時中から戦後にかけての輸入杜絶、原料拂底と、ストック品の消耗は必然に國產醫藥品の不振を招來するであらうことが豫想され、憂えられてゐるのであるが、ここで戰時中からも、やかましく唱えられた生薬の重要性が、あらためて再認識されるに至つたことは當然の